

NPO

# 北上町相川地区で 地域の人とつながる継続的な支援を。

七ヶ宿町

海藤 節生 NPO法人「水守の郷・七ヶ宿」理事長

取材日 2011.5.19

水源地七ヶ宿の役割と魅力を伝え、地域の自然と人を守り育てる事業に取り組む。震災後は北上町相川地区で瓦礫や危険木の撤去、伐採などを行う他、焚付け用にと「仙台光のページェント」の使用済み割り箸と間伐材の炭を寄贈するなど継続的な支援を行う。また、「水守の郷・七ヶ宿」では「海と山をつなぐ復興プロジェクト」を展開している。

## 3月11日 14時46分

僕の3月11日は、他の人とは違った形でやってきた。3月8日夜、昨年11月から病気で入院していた母が亡くなった。3月11日は「友引」にあたる。お寺の住職さんと相談の上、高齢かつ遠方の親戚に配慮し、通夜、葬儀を早めて行なった。3月11日、仙台市内にある実家に仮祭壇を設け弔問客のお相手をしていた。近所のおばあちゃんがお線香をあげに来ていた、まさにその時に地震が起きた。母の遺影や位牌、お花がすべて倒れ祭壇から落ちてきた。もし母が病院に入院していなければ、この家で1人地震に遭っていた母の姿を想像しゾッとした。弔問客のおばあちゃんを抱きかかえ一歩も動けずいろんな事を頭に浮かべた。妻と子どもにもトイレに避難するように言った。後は神頼み。家具には転倒防止を施していたので倒れることはなかった。おばあちゃんは気丈にも自分であげたお線香が祭壇から落ちたのを見て指でもみ消していた。

揺れが収まるのを待って、おばあちゃんを自宅まで送り届けようと外に出た。仙台市内の電柱の多さとその上のトランスに恐怖を感じた。途中、小学校の校庭に児童が集合し、先生が点呼をとる姿を見た。

学生の時に体験した「宮城県沖地震」の記憶がよみがえって来たが、その時より「たいしたことないな」というのが自分自身としての印象だった。当時はあちこちのブロック塀などが倒壊していたが、今回は近所の周辺に目立った被害が見られなかった。耐震補強や建築基準の見直しなど、過去の教訓が活かされているのだろうと感じた。

その後、全く通じない携帯電話を操作しながら妻の実家へ安否確認に向かった。屋根や塀の瓦は被害が大きかった。瓦を片付け、シートを貼って、余震に備え立ち入れないように予防線を張った。ガスはプロパンで石油ストーブもあり、さらに水を近くで手に入れることができた。ライフラインの復旧も早かったため、日々の生活にさほど不便を感じることはなかった。ガソリン



不足は別としてだ。

宮城県沖地震の時、普段家に帰って来ない父親と、あまり家に居ることのない自分と、弟と母の4人で、停電の中ろうそくを囲んだのを思い出す。家族が共にいる幸せを感じた。今回も妻の実家で義父や、平常時は別棟にいる親戚と、皆が同じ部屋で寝食を共にすることとなった。他界した両親と同じ屋根の下で暮らすことはできないけれど、ひとつ屋根の下で家族が集うことに何とも言えぬ悦びを感じた。

## ボランティア活動

震災直後はNPO法人日本エコツーリズムセンターが中心となり発足した「RQ市民災害支援センター」にボランティアで入り、支援物資の配送を行っていた。震災直後から行政をはじめさまざまな団体・ネットワークが支援に入っていたが、上手く連携できていない。支援の方法に疑問を持ち始めていたその時、本吉町の小泉中学校避難所で「ひまわりおじさん」に出会った。この方は阪神淡路大震災の被災者でもあり、震災後は給水ボランティアやお風呂の出前ボランティアを行い、ひまわりの種を集め、瓦礫の街にひまわりを咲かせる活動をしている。小泉中学校を拠点に継続的に支援し、時間の経過と共に変化して行く被

災者のニーズを先取りしながら適切な支援を行っているのを見て、こういった支援の仕方がとても理想的に感じた。

自分はどこでどんな支援ができるだろう?と模索していたところ、個人的な繋がりから瓦礫の処理のためにチェーンソーを貸して欲しいという依頼が舞い込んできた。チェーンソーの扱いは難しい。そうしたワークがあるのであれば、僕たちで切ってあげようと七ヶ宿の有志が集まった。北上町の相川地区に入り1人ひとりの顔が見えてきた。ここを継続的に支援していこう!と決め、活動が始まった。当初は倒壊した家屋の木材を燃料として使用するために、また津波で根がさらわれた危険木を伐採することが僕たちの仕事であった。伐採された木は炊き出し用の薪として使われた。次第にボランティアの問い合わせが集まってきた。僕たちは可能な限り現地に連れて行ってあげた。厩に合わせ鯉のぼりをあげたり、カーネーションの鉢植えを持って行ったりもした。

訪問を重ねるごとに地域の方達との繋がりが深まり、行けば帰りがけに「今度はいつ来るのや?」と声をかけられるようになった。山形県の高島町や東京のNPOがたくさんボランティアを連れてやってくる。「こんな人達がいつから連れてきていいか?」と聞くと快く「おお、連れてこい」と言ってもらえる。今のミッションは、川を遡ってきた津波により木やのり面に引っかかったゴミや川の瓦礫を取り除く作業だ。気の遠くなるような作業だ。

## 2ヶ月を経過して

学び、支え合い、繋がっていく、これを再構築できるかできないかが、これからの僕たちへの課題ではないかと思う。七ヶ宿と相川には共通する点が多いと感じている。過疎化する山に人が住むことの大切さを認識し活動している自分、漁業を生業にそこに住み海を守ってきた人達の思い。これからもお互いに頑張ろう。「被災地支援」という言葉ではなく、それぞれの地域の未来創りだと考えている。自然と共生した海と山でつながりながら競い合う、学び合いながら未来を創っていくこと。僕たちが住む場所は日本という大地を守っていくための大切なフィールドなのだと思う。

## 振り返って見て思うこと

被災者のニーズとは異なる支援があったり、被災者のためと言うよりも自分のための活動が見受けられた。そういう場面を目の当たりにするたび、自分自身の活動について振り返る反面教師的学びの場となった。こういった経験を今後活かして

行くことが大切だと思う。

そして、改めて地域活動というのは非常に大事であると感じた。分け合うといった感覚での未来作りを、日本人が試されているのではないだろうか。震災直後、みんながいろんな物をシェアしていた。奪い合い、戦い合い、競争し合いの社会から分け合う社会、「シェア」という感覚が、これから日本がうまくやっていくためのキーワードではないかと思う。今回の震災で自分の進む道を確信した。



撮影：2011.5月 チェーンソー隊



撮影：2011.6月 ごみ拾い



撮影：2011.12.8 手作りしたバスの停留所